

蛇 込 遺 跡

太陽光発電所建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2023

長野県富士見町教育委員会

例 言

- 1 本書は令和元年に長野県富士見町教育委員会が行った蛇込遺跡^{ヒョウコミ}の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は太陽光発電所建設工事に伴う発掘調査として富士見町教育委員会が実施した。
- 3 本書に係る発掘調査は以下の日程で行った。
発掘調査：令和元年7月23日～10月17日
整理作業：令和4年10月1日～令和5年1月31日
- 4 発掘調査はいずれも副島蔵人が担当し樋口誠司が補助した。本書は副島蔵人が第1・3～5章、平澤愛里が第2章を執筆し、副島が編集した。また編集において小松隆史と樋口誠司が補助した。
- 5 出土遺物の自然科学分析についてはバリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、同社からの報告書を副島が編集し第4章とした。
- 6 本報告に係る出土品、諸記録は井戸尻考古館に保管されている。
- 7 調査担当者および発掘調査作業員・整理作業員は以下の通り。

発掘調査

調査担当者 副島蔵人
調査員 樋口誠司
発掘作業員 小池敦子 小林やす子
ボランティア 朝香輝朗 根本崇史 根本万輝

整理作業

整理作業担当 副島蔵人
整理作業員 平澤愛里 揚妻優希 五十嵐裕子 伊藤知恵 小池敦子 五味加奈子
鶴田敏子 根本万輝

- 8 発掘調査前の予備調査として、富士見町立富士見中学校1年生が7月18日に表面採集調査を行った。
- 9 発掘調査及び出土品整理作業では下記の方々にご指導、ご助言を賜った。厚く御礼申し上げる。
岩永祐貴 柳原功一 小林公明 武藤雄六

凡 例

- 1 本書で使用した地図は1：2500「富士見町都市計画図」、1：10000「富士見町の遺跡」(2015)である。
- 2 挿図の縮尺については原則として下記のとおりであり、各挿図中に示してある。
調査区全体図：1/300
遺構配置図…1/40および1/80
遺物：石器…1/3（一部1/6）、小形石器…1/2
縄文土器（実測図）…1/4、縄文土器（拓本、破片実測図）…1/3
- 3 方位は各国に示した。いずれも磁北ではなく真北を指している。
- 4 写真図版の遺構および遺物の縮尺はすべて任意である。

目 次

例言・凡例

目次

第1章 発掘調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯と概要	1
第2節 発掘調査の概要	1
第2章 遺跡の立地と環境	3
第1節 遺跡の立地	3
第2節 周辺の遺跡	3
第3章 遺構と遺物	4
第1節 遺構と遺物	4
第4章 自然科学分析	27
第1節 分析概要について	27
第2節 放射性炭素年代測定	27
第5章 まとめ	29
第1節 出土遺物について	29
第2節 蛇込遺跡の縄文中期集落について	29
付. その他の調査	30
参考文献	
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と調査地点	2	第13図 4号住居址出土遺物	16
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡	3	第14図 南北・東西トレンチ遺構位置図	17
第3図 全体図	5	第15図 南北トレンチ出土遺物	18
第4図 1号・2号住居址	6	第16図 東西トレンチ出土遺物	19
第5図 1号住居址出土遺物 (1)	7	第17図 地割れ痕	20
第6図 1号住居址出土遺物 (2)	8	第18図 地割れ痕出土遺物	20
第7図 1号住居址出土遺物 (3)	9	第19図 トレンチ1・2遺構位置図	23
第8図 2号住居址出土遺物 (1)	10	第20図 トレンチ3・4遺構位置図	24
第9図 2号住居址出土遺物 (2)	11	第21図 トレンチ1～4出土遺物	25
第10図 2号住居址出土遺物 (3)	12	第22図 遺構外出土および表面採集遺物	26
第11図 3号・4号住居址	14	第23図 暦年校正結果	28
第12図 3号住居址出土遺物	15		

第1章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経緯と概要

平成30年8月に開発事業者（リベラルソリューション株式会社）より太陽光発電事業に伴う埋蔵文化財の照会があり、開発予定地「富士見町富士見9715」が蛇込遺跡（No.79）に該当することが判明した。町内において重要な集落遺跡であることから、県教育委員会を交えた三者協議を行うこととなり、平成31年2月に協議を行った。

協議の結果、重要な遺跡であるが計画の変更はできないという事から、雨水排水溝のみ発掘調査を行い、太陽光パネル設置部分については保護盛土層を設けてから、杭打ちをせずに置き基礎で遺跡の保護を図ることで合意した。

文化財保護法93条に基づき令和元年5月に長野県教育委員会に届出、発掘調査の指示があったので発掘調査を行うこととし、日程などの調整を行なった。

7月23日より発掘調査を開始することで調整していたが、富士見中学校の総合学習で縄文時代についての学習を行っていたため、予備調査として7月18日に中学生約40名と現地の表面採集を行った。当該地の中央より北半分で黒曜石の剥片や土器片をコンテナ半箱分ほど拾うことができ、遺構の広がりを知る目安となった。

7月23日よりバックホウで排水溝部分の掘削を開始し、遺構の確認を行った。排水溝トレンチの北端と西端で小堅穴を数基確認したが、表面採集できた遺物の量に対して遺構の数が少なかった事と、残りのパネル設置部分については盛土で保護することになっているものの、最低でも20年は構造物が設置された状態になることから、当該地全面に遺構確認のための試掘を追加することで事業者と調整した。

8月1日に追加のトレンチ4本を入れたところ、約60基の小堅穴と、切り合っている住居址2軒を検出し、住居址部分のみトレンチを拡張した。2軒の住居址（1号住居址・2号住居址）については確認面で炉石が露出していた点、過去の文献に堆積層が浅いとの記述がある点を考慮して完掘し、残りの遺構については平面形状の確認のみにとどめた。調査の過程でさらに2軒の住居址が発見され、調査区全域で4軒の住居址と79基の小堅穴となった。

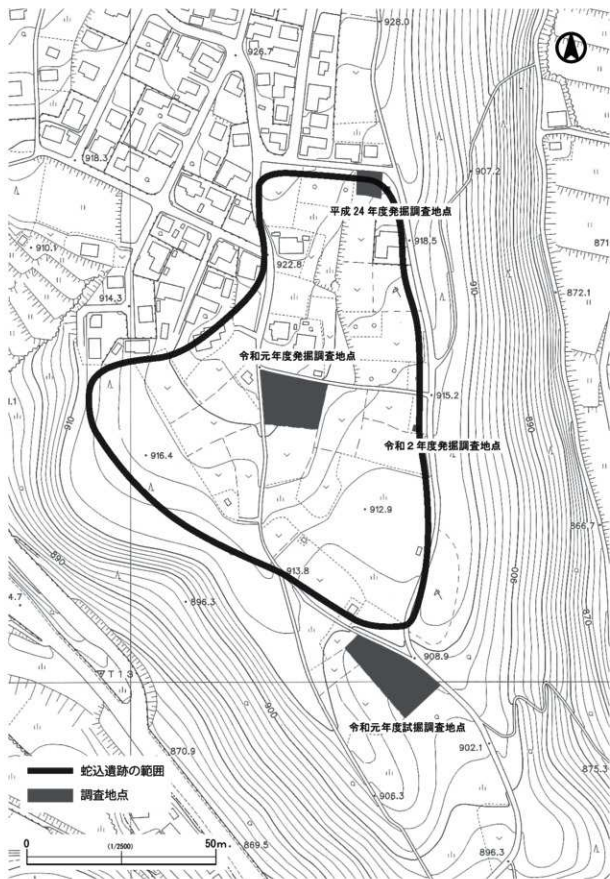
住居址完掘後、記録と測量を行い、8月19日に埋め戻し作業を行った。8月20日に埋蔵物発見届等の提出、8月30日に事業地内の抜根作業の立会い、9月22日に盛土作業の立会い、10月17日に電柱設置作業の立会いを行い、調査をすべて終了した。

第2節 発掘調査の概要

破壊される排水溝設置部分（124.97㎡）をバックホウで掘削し、遺跡の有無並びに遺構確認を行ったところ、北端で9基、西端で7基の小堅穴を発見、東南で地震による地割れ痕1箇所を発見した。掘削後、測量および写真撮影を行った。

盛土予定部分で遺物が多く採集できることから、追加で4本のトレンチ（計271.45㎡）を入れ、2軒の堅穴住居址（1号および2号住居址）と63基の小堅穴を発見した。また、トレンチ1から炉と埋炭が2基ずつ発見されたため、さらに2軒の住居址（3号および4号住居址）があることが判明した。

住居址については覆土が浅いことから完掘調査し、小堅穴については盛土で保護されることから平面形状を記録して埋め戻すこととした。小堅穴については1基（2号小堅穴）のみ完掘し、墓墳であることが判明した。



第1図 遺跡の位置と調査地点 (1:2500)

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の立地

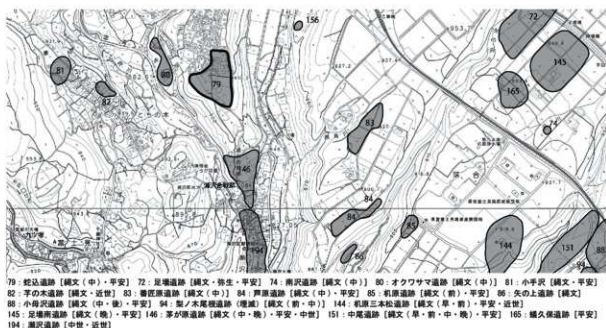
本遺跡は富士見駅の南東約1km、富士見町瀬沢区と富士見台区が接する場所に位置する。立場川と乙貝川に挟まれた尾根状台地の、標高約920m地点の平坦部に在り、八ヶ岳を南麓と西麓を画する立場川の右岸に立地している。南方に鳳凰三山を望み、東側は100mを下る急崖ののち、立場川の河床に達する。

第2節 周辺の遺跡

蛇込遺跡は、富士見町における周知の埋蔵文化財包蔵地No.79「蛇込遺跡」として登録されている縄文時代中期・平安時代の集落遺跡である。本遺跡の初出となったのは、大正13年に刊行された『諏訪史 第1巻』であり、『諏訪郡先史時代遺物発見地名表』において「瀬澤血ヶ原（蛇込）」として報告されている（鳥居 1924）。その後、昭和39年に表面採集による調査が行われ、昭和40年に発行された『井戸尻』（藤森編 1965）では、地表の観察だけで7軒の住居址が確認でき、遺物の集中箇所もあわせると20軒に及ぶだろうとの所見が示され、「縄文時代中期中葉から末にかけての相当大規模に発達した集落址で、今後の発掘調査に大きな期待がもたれるわけである。」と述べられている。

本遺跡の同丘陵上には、西にオクワサマ遺跡（No.80）、南端に茅が原遺跡（No.146）の縄文時代中期の包蔵地が存在する。また、周囲には西に小千沢遺跡（No.81）・茅の本遺跡（No.82）、立場川を挟んだ対岸の丘陵には、番匠原遺跡（No.83）・芦原遺跡（No.84）・矢の上遺跡（No.86）といった縄文時代の包蔵地が点在しているがいずれも散布地であり、集落址と目されるものはない。この辺りは、大規模集落が集中する境地域や立沢地域と比べて集落遺跡が非常に少ないが、本遺跡は古くからその存在が認められ、この地域の拠点的な集落遺跡ではないかと注目されてきた。

縄文時代以外の遺跡には、平安時代の集落址である黒鳥遺跡（No.156）、中世・近世の古村である瀬沢遺跡（No.194）などがある。



第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:10000)

第3章 遺構と遺物

第1節 遺構と遺物

本遺跡は『井戸尻』（藤森編1965）に精査未了の遺跡として取り上げられている。その中で、「黒色土はきわめて浅く、ほとんどはロームを粉砕して耕作している状態であったので、地表からの観察だけでは堅穴の発見は容易で、堅穴の存在する箇所は、円形に黒変し、土器・石器などの遺物が集中しているのが認められた。」との記述があり、今回の調査でもその言葉通り、20cmで遺構確認面に達してしまう浅さであった。南北トレンチの埋没沢を除いては、耕作土直下がローム層となる。

調査の結果、堅穴住居址4軒と小堅穴79基と、これらに伴う縄文時代中期後葉の石器・土器を発見した。

1号住居址

径6mの円形の堅穴住居址である（第4図）。遺構確認面で炉石が見えていたことから住居址と判断できた。2号住居址と切り合っているが、平面で新旧関係が確認できたため、新しい本址から掘削を進めた。

堆積土は約15cmと薄く、南側の壁は残っていない。途切れ途切れに周溝が巡らされている。床面は全体が固く締まっている。柱穴はP1・2・3・5・6・7・8・9・10・11である。このうち主柱穴はP3・5・7・8・11（深さ31～64cm）で、5本柱であると想定される。北側に浅く攪乱が入っていたが、攪乱の土を除去しても他の柱穴や掘り込みは確認できなかった。炉は石囲炉で、中央やや北西側に位置しているが焚口側の石のみが残され、他は抜き取られているようである。炉内からは唐草文系Ⅲ段階の土器片（第6図17・18）が出土している。また、中央床面に80cmほどの被熱痕と焼土がみられ、石囲炉とは別に地床炉があった可能性も考えられる。南東側に埋甕（第6図16）があり、正位で埋められていた。P2・13は深さと形状から貯蔵穴と考えられる。

遺物は多くない（第5～7図）。1・2は石鏃である。1は撥形をなす。2は両端とも鏃先のようにになっている。3～5は石庖丁で、いずれもしっかりと刃が作り出されている。6～8は凹石で、磨り面は見られない。9は団子石である。10はやや小型の定角式磨製石斧である。11は磨りうすであるが、あまり使用していないのか磨り面は浅い。12は餅石で、平坦面に磨り痕や敲打痕は見られないが、凹みが数か所つけられている。13は台石と思われる。目立った使用痕はないが、側面に一部敲いた痕が見られる。14・15は石鏃で、15は片面に自然面を残して非常に小さい。

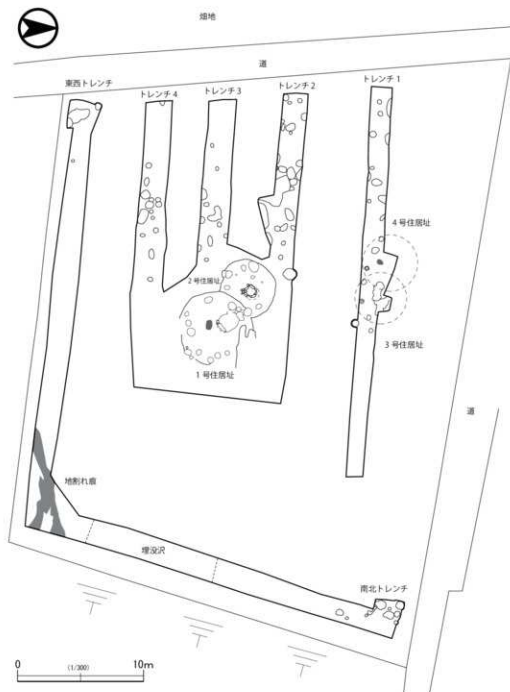
16は埋甕で、唐草文系と曾利式が折衷したような土器である。横位沈線や蛇行懸垂沈線から唐草文系Ⅲ段階（曾利Ⅲ式）の土器と思われる。17・18はいずれも炉内から出土した唐草文系Ⅲ段階の土器である。腕骨文の描き方からすると18より17の方がやや古い印象を受ける。19は床面出土の曾利Ⅲ式の土器である。20・21は覆土出土である。20は曾利Ⅳ式土器だが、21は時期不明である。

破片資料は文様などから22～26が曾利Ⅱ式、27～35が曾利Ⅲ式、36～38は唐草文系Ⅰ、39は唐草文系Ⅱ、40・41は唐草文系Ⅲ段階の土器と考えられる。

埋甕の16および炉内の17・18、床面出土の19から推して、本址の時期は曾利Ⅲ期とみてよいだろう。

2号住居址

1号住居址の北西に位置する径4.7mの円形の堅穴住居址で1号住居址に切られている（第4図）。1号住居址と同様に深さ20cm程度と浅く、周溝は途切れ途切れに巡っている。床面はハードローム面を平らにしたものだが、1号住居址のように固く締っていない。柱穴はP1・4・5・7・9・10があり、このうちP1・4・5・7・9を主柱穴とする5本柱の住居址と想定される。炉は石囲炉で、焚口以外の炉石を立たせている。炉内からは斜行文のある土器片（第10図430）が見つかっている。P6・8は貯蔵穴と推定される。



第3図 全体図 (1:300)

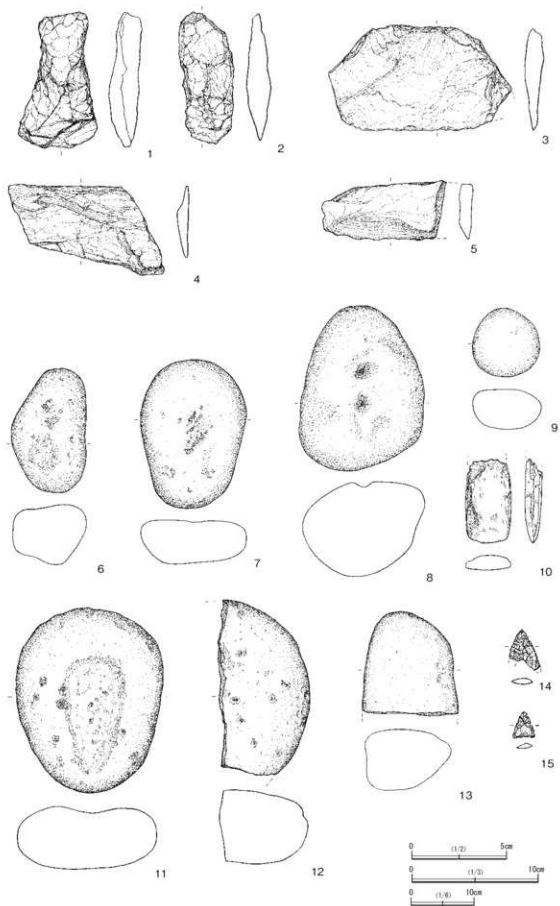
P 2は住居の壁に接するように掘られているが、形状と深さから墓墳と考えられる。確認面で住居覆土より暗い色をしていたため本址より新しいと考えられる。

出土遺物は石器が多い(第8～10図)。1～4はいずれも石鍬である。2はあまり定形的ではない。3・4は偏刃となる。5～8は石庖丁、9は叩き石、10・11は棒状礫器である。12～20は凹石であり、1軒の住居址としては出土点数がやや多い。21～23は台石である。いずれも片面が平坦で座りが良い。21・22には磨り面は無く、22は両面に敲打痕が残る。23に目立った使用痕はないが、中央に浅く磨ったような溝が見られる。24は小型の定角式磨製石斧、25は石錐である。

土器はいずれも破片資料である。30と38が炉からの出土である。26はP 6から出土した破片で、X



第4図 1号・2号住居址 (1:40)

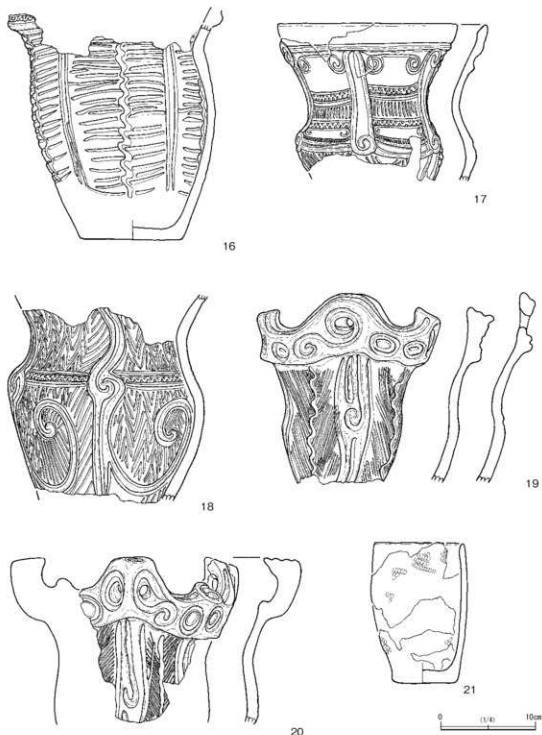


第5図 1号住居址出土遺物(1) (1~10: 1/3、11~13: 1/6、14・15: 1/2)

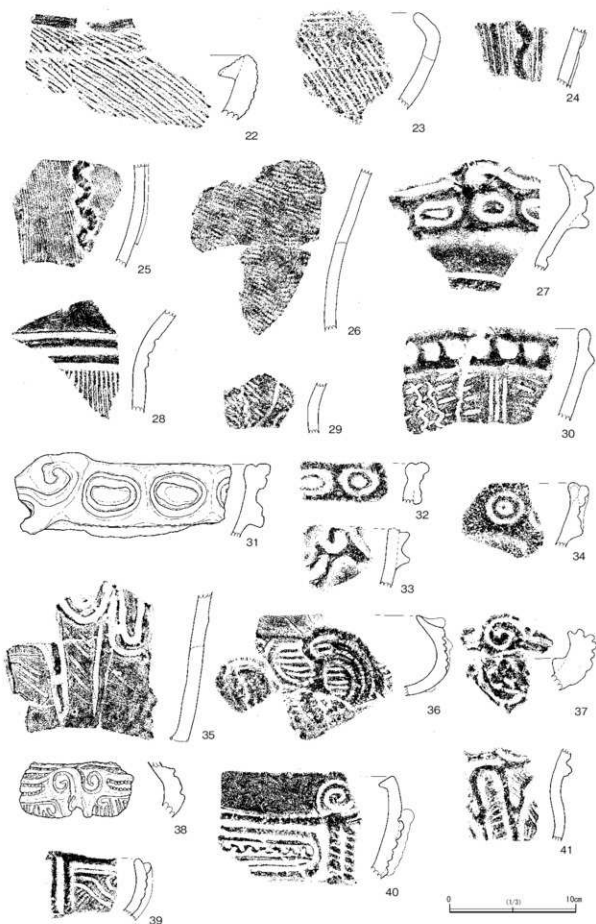
1: ホルンフェルス、2: 砂岩、3~5: 粘板岩、6~9・11~13: 輝石安山岩、10: 緑色凝灰岩、14・15: 黒曜石

字状把手付深鉢の口縁と思われる。口唇部の断面形状からみて曾利Ⅲ式頃だろう。27・28は曾利Ⅰ式、29～38が曾利Ⅱ式、39が曾利Ⅲ式、40が曾利Ⅳ式である。32はこの時期に珍しい正反撚り合わせの縄文が施文されている。41～44は唐草文系土器であるが詳細な時期は不明である。おそらく唐草文系Ⅰ～Ⅱ段階のものだろう。41と42は接合しないが同一個体と思われる。45は加曾利ⅤⅢ式である。46・47は有孔罅付土器の破片で、47は内外面に赤色顔料が残っている。48は深鉢の底部片である。網代痕はない。

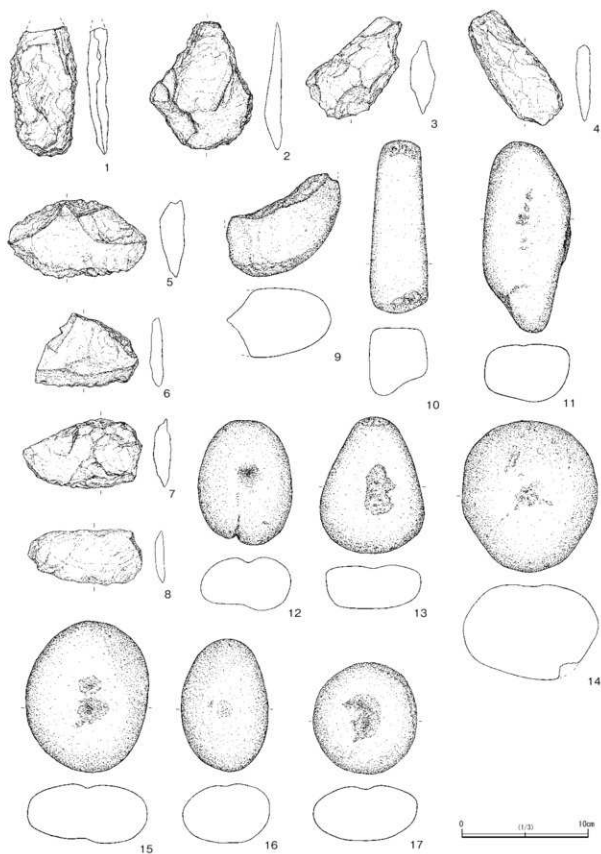
本址は、1号住居址との新旧関係や出土遺物から推して、曾利Ⅱ期の住居址と考えられる。



第6図 1号住居址出土遺物（2）（1/3）

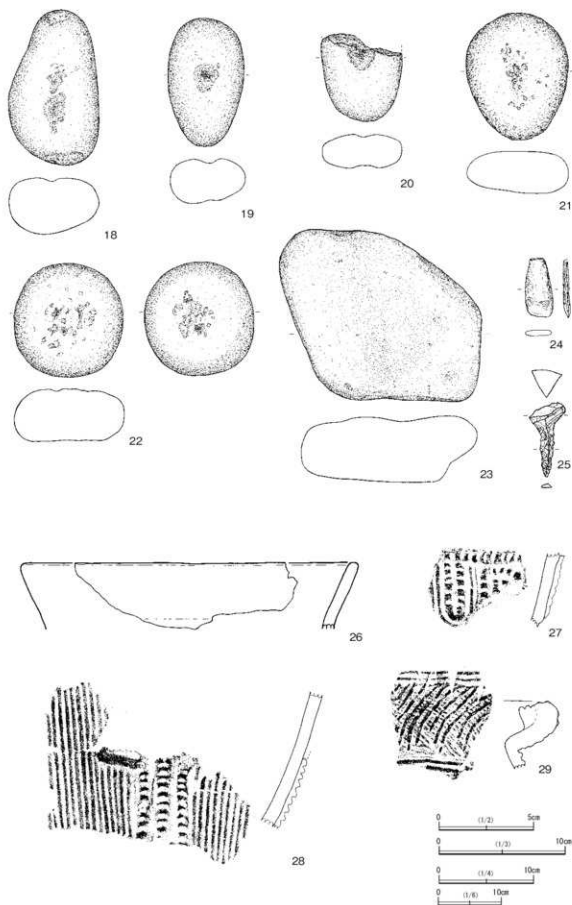


第7图 1号住居址出土遺物(3)(1/3)



第8図 2号住居址出土遺物(1)(1/3)

1～4・8：粘板岩、5：硬砂岩、6・7：ホルンフェルス、9～17：輝石安山岩



第9图 2号住居址出土遺物 (2) (18~20·24·27~30: 1/3、21~23: 1/6、25: 1/2、26: 1/4)

18~23: 輝石安山岩、24: 綠色凝灰岩、25: 黑曜石



第10図 2号住居址出土遺物(3)(1/3)

3号住居址

重機でトレンチ1の掘削を行った際に埋甕を発見したため、調査範囲を拡張したところ焼土が見られたことから住居址とした(第11図)。壁や周溝は発見されず、平面形状や規模は不明である。表土直下が床面という感覚であった。炉を中心として埋甕を入り口と仮定すれば、4m程度の住居址になるだろう。柱穴は炉や埋甕との関係からP3・11が考えられる。埋甕と炉との距離を考えると、P12・13は本址にともなわない掘り込みである可能性が高い。床面はソフトロームで貼り床や硬化面は確認できなかった。炉は石囲炉であるが炉石を抜かれており、その痕跡も確認できた。内部に焼土が厚さ5cmほど残っている。炉の奥側は床面が厚さ2~3cm程度焼けていた。

埋甕は深鉢の口縁部(曾利Ⅱ式)を逆位にしたもので、地山の掘り込みにはほとんど隙間がない。埋甕の南東側には石罫(第12図1)が斜めに立っていた。埋甕を外すと拳大の平たい安山岩礫が据えられていた。遺物はほとんど見られない。安山岩礫を取り上げると、直径20cm、深さ20cm程度の小さい掘り込みがあり、黒色土が非常に硬く詰められていた。

出土遺物は少ない(第12図)。1は輝緑凝灰岩製の石罫で、乳棒状磨製石斧を転用したものと思われる。発見当初は加工面を下にしていたため、磨製石斧が出土したと思われたが、取り上げると石罫であった。2は靴形罫である。3は埋甕の内部に据えられていた安山岩礫である。加工痕はみられない。4は炉近くで発見された凹石である。

5は逆位に埋設された埋甕で、曾利Ⅱ式である。6~11は曾利Ⅱ式で、6は炉の内部から発見された。12は小片のため詳細不明だが唐草文土器の口縁部突起とみられる。13は土器の全体像がよくわからないが、施文から考えれば曾利Ⅱ式と思われる。14は素文の浅鉢で、炉の中から発見された。内外面に顔料が塗られ、肩部上が赤く、下は黒い。炉内から見つかっているため、肩部下は黒色顔料なのか炉の熱で黒く変色したのかは不明である。

埋甕と炉内の土器から、本址は曾利Ⅱ期の住居址である。

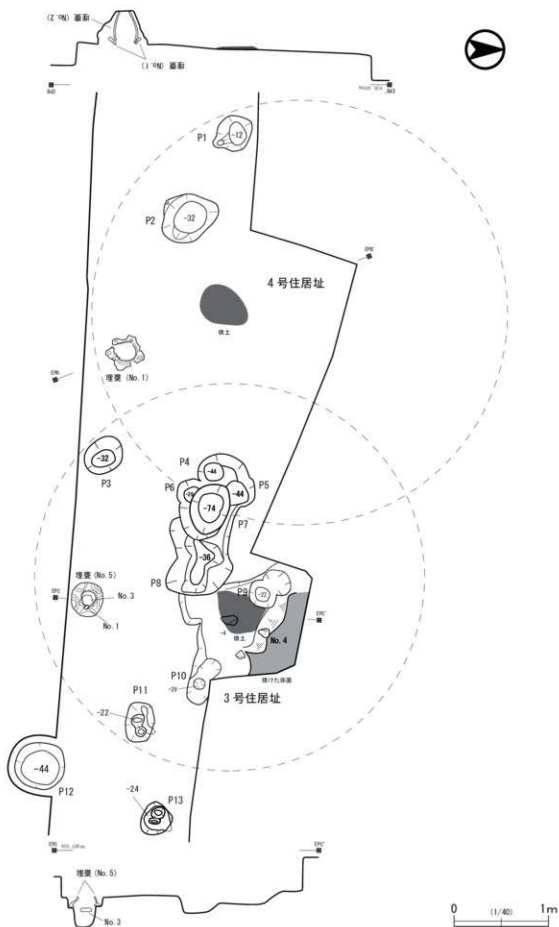
4号住居址

トレンチを掘削していくとソフトローム面に焼土が現れ、周辺を精査すると柱穴らしき穴2基を発見したため、住居址と判断した(第11図)。壁や周溝は発見されず、平面形状や規模は不明である。埋甕を入り口と仮定すれば、4m程度の住居址になるだろう。柱穴は炉南西にあるP2のみだが、3号住居址の西炉脇にあるP4~7も本址の柱穴になる可能性がある。床は固くなく耕作土直下のソフトローム面で、すこし削平されているようである。炉は焼土のみで炉石を抜いた痕跡もなかった。

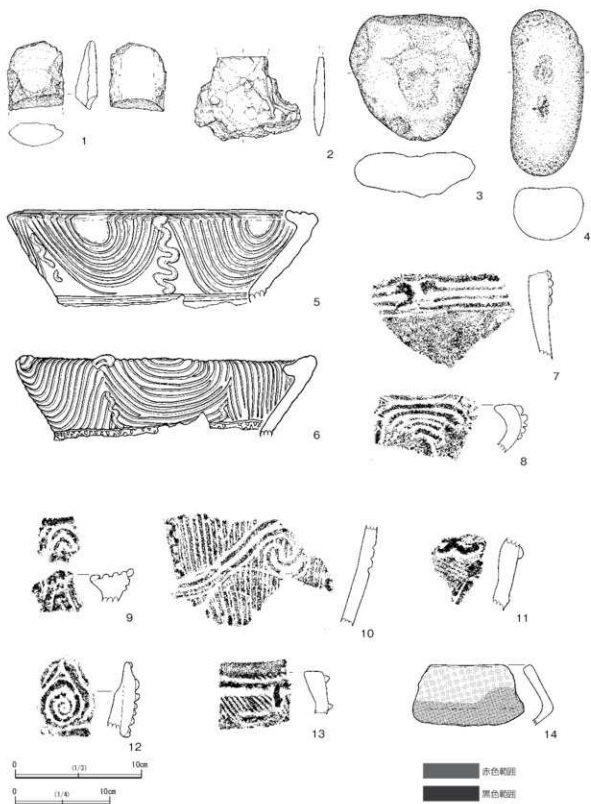
埋甕は曾利式土器の口縁部(第13図1)を逆位にして、正位に据えられた唐草文土器(第13図2)の口縁部に蓋をするように据え付けられて、密着していた。埋甕の掘り方は埋甕にぴったりとは同じ大きさで掘られており、底面は土器に接していた。埋甕内部の土はローム粒と炭粒が少し混じる暗褐色土であった。

発見された遺物は少ない(第13図)。1と2は埋甕である。1は曾利Ⅲ式、2は唐草文系Ⅲ段階の土器である。2の土器の外面に付着していた炭化物について放射性炭素年代測定を実施したところ、4830~4584calBP(2σ)の値を示した。3は曾利Ⅱ式、4・5は曾利Ⅳ式である。

埋甕から推して、本址は曾利Ⅲ期の住居址である。



第11図 3号・4号住居 (1:40)

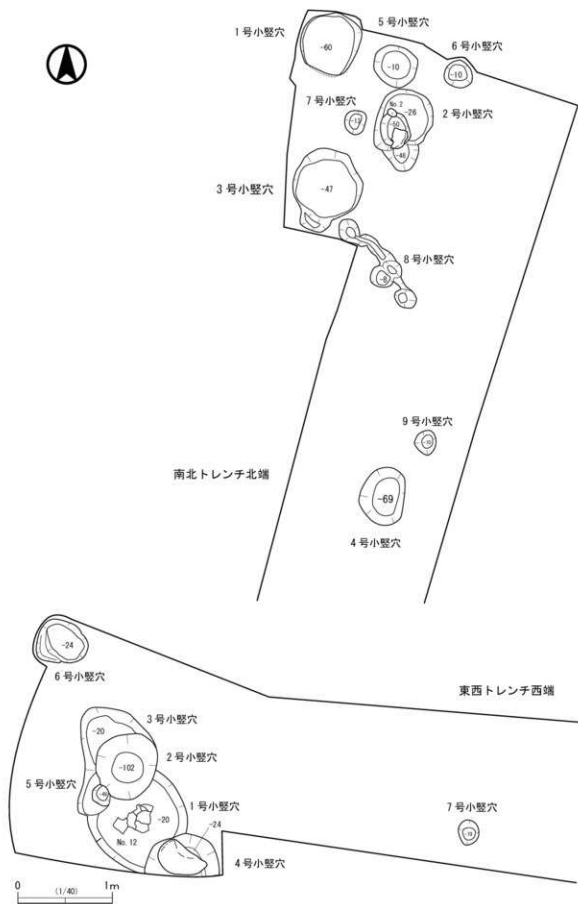


第12図 3号住居址出土遺物 (1~4・7~14: 1/3, 5・6: 1/4)

1: 輝綠凝灰岩, 2: 粘板岩, 3・4: 輝石安山岩



第13図 4号住居址出土遺物 (1・2:1/4、3~5:1/3)



第14図 南北トレンチ・東西トレンチ 遺構位置図 (1:40)

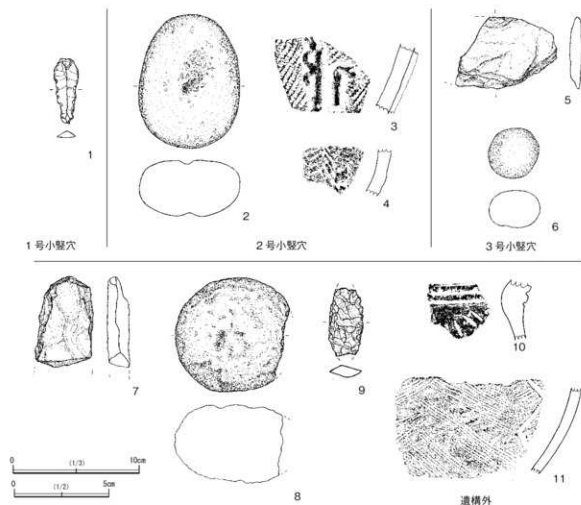
南北トレンチ・東西トレンチの小竪穴

太陽光発電所建設に伴う排水トレンチ部分であり、L字形をなす。南北トレンチおよび東西トレンチとした。このトレンチについては記録保存のため小竪穴16基すべてを完掘した(第14図)。

南北トレンチは中央部分がやや深く、埋没沢と思われる黒色土が堆積していた。南北トレンチで遺構が確認できたのは北端である。9基の小竪穴を発見した。うち1号・3号は壘形で底面が平らなため、貯蔵穴と考えられる。2号と4号は細く深さがあるため柱穴と思われる。この柱穴のうち4号小竪穴は底面に薄く白色粘土層がみられた。周辺を精査したが床面と思われる硬化面などは確認できなかった。また、墓域付近にある溝(8号小竪穴)は性格不明だがいびつなため、住居の周溝ではないようである。ほかの小竪穴の性格については不明である。

いずれも出土遺物は少ない(第15・16図)。1号小竪穴からは剥片石器が発見された。両端に刃がつけられており、刃部には使用による刃こぼれがみられる。2号小竪穴からは両面に凹みをもつ凹石、曾利Ⅱ式と唐草文系Ⅱ段階の土器が見つかった。3号小竪穴からは折れた石庖丁と石団子が出土した。7～11は遺構確認作業中に発見した遺物である。7は折れた石鍬、8は凹石である。9は中期の遺跡には珍しいが、尖頭器とみられる。10は曾利Ⅳ式土器である。

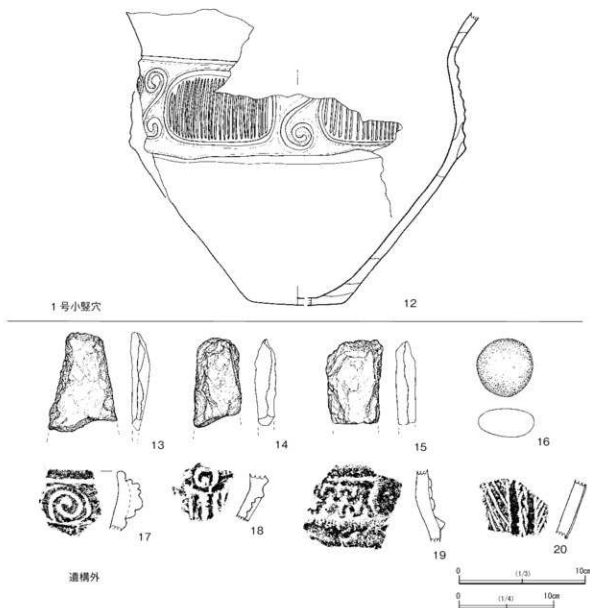
東西トレンチの西端では5基の小竪穴を発見した。7号小竪穴から東側には遺構はみられない。1号小竪穴は広口壺が埋納された墓域、4号小竪穴も大きな安山岩礫が3つ詰められていたため、墓域と考えてよいだろう。2号小竪穴は深さ1mあるため、柱穴とみられるが、周辺の精査で床面は確認できなかった。そのほかの小竪穴については性格不明である。



第15図 南北トレンチ出土遺物 (1・9:1/2, 2~8・10・11:1/3)

1・9:黒曜石、5:粘板岩、6・8:輝石安山岩、7:ホルンフェルス

出土遺物は少なく、1号小竪穴で発見した広口壺以外は遺構外の遺物である。12は1号小竪穴から出土した曽利Ⅲ式の広口壺ないし両耳壺である。13～15は石鍬、16は団子石である。17～20の土器は小片のため詳細な時期は不明だが、唐草文系Ⅰ～Ⅱ段階と思われる。



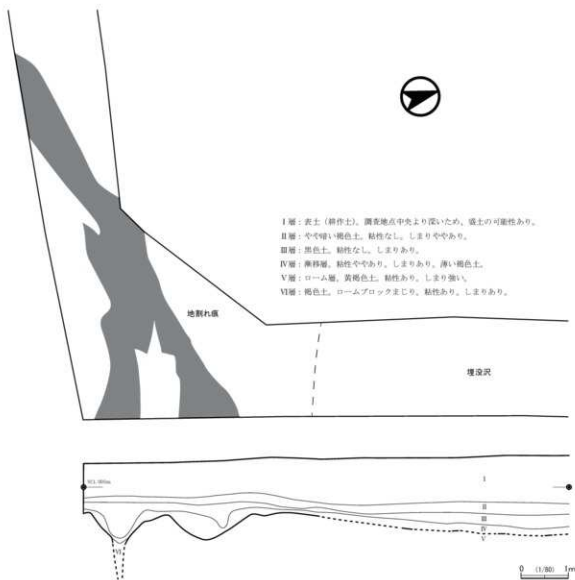
第16図 東西トレンチ出土遺物 (12: 1/4、13～20: 1/3)

13: 硬砂岩、14・15: 粘板岩、16: 輝石安山岩

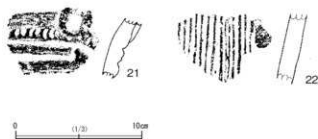
地割れ痕 (地山の裂傷)

南北トレンチ・東西トレンチのちょうど境目を掘削中に、平面で黒い斑なシミを発見した (第17図)。覆土に縄文土器片なども入っていたことから、溝状の遺構であると想定しトレンチ東側壁面に沿ってサブトレンチを入れた。土器片などがまれにみられるが、遺構のラインや掘り方が安定せず、断面では漏斗状に狭まっていき、深さ1mを超えても底面が見えないことから地震による地割れ痕であると判断し、掘削を止めた。類似例が町内では机原三本松遺跡、諏訪市では荒神山遺跡などに見られる。

出土遺物は縄文土器の細片が多く、図示できるものはほとんどない (第18図)。21は井戸尻Ⅰ式、22は曽利Ⅰ式の破片とみられる。これらの遺物から、この地割れが生じた原因は中期後葉以降の地震によるものと思われる。



第17図 地割れ痕 (1:80)



第18図 地割れ痕出土遺物 (1/3)

トレンチ1～4の小堅穴

トレンチ1～4で63基の小堅穴を確認した（第19・20図）。発見された小堅穴については、将来の発掘調査が可能であるため、平面形状のみの確認としたが、内容を確認するため、トレンチ2にあった2号小堅穴を完掘した。内部に逆位の磨りうすがあったことと、遺構の形状から墓であることが判明した。

もう1基トレンチ4の10号小堅穴を掘削したが、少し掘った段階で柱穴になることが判明し、それ以上の掘削は行わなかった。

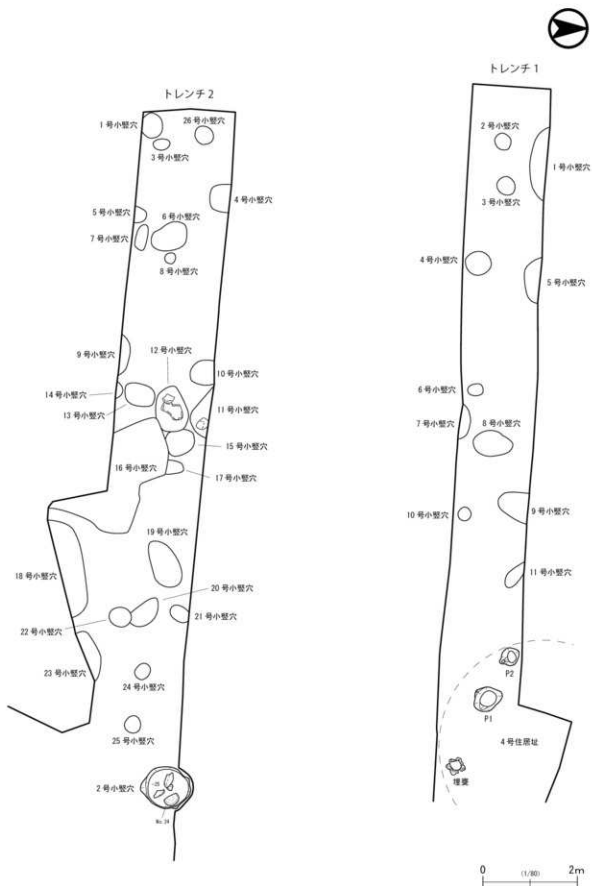
小堅穴のうち、柱穴と思われる遺構の周辺で床面が検出できていないため、耕作によって削平されているか、または小堅穴群の中に高床建物の柱穴がいくつか含まれていると思われる。遺構確認面では詳細は不明だが、形状から墓墳が多くを占め、浅い掘り込みや地形の窪みが含まれているものと思われる。

トレンチ3の2号小堅穴以外は掘削していないため、遺構出土の遺物は少ない（第21図）。23はトレンチ1から発見された凹石、24はトレンチ2の2号小堅穴から発見された磨りうす、26はトレンチ3の7号小堅穴上面から発見された丸石である。25はトレンチ2から発見された井戸尻式とみられる土器片である。

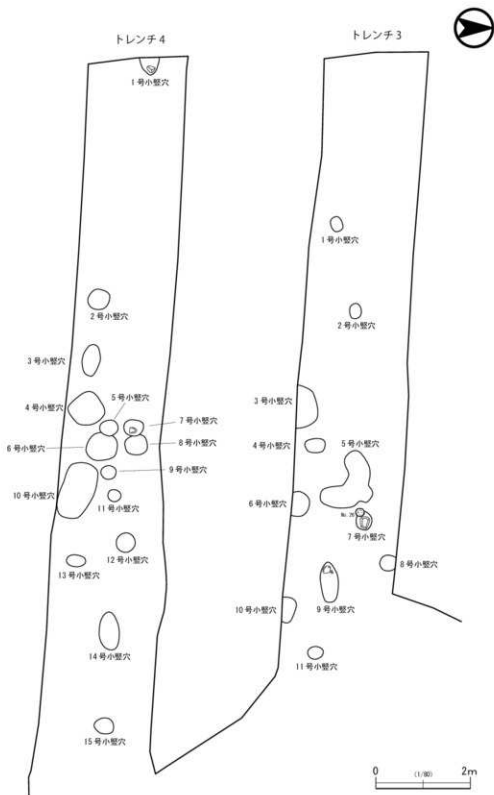
表1 小堅穴観察表

トレンチ	小堅穴	色調	しまり	内容物	備考
トレンチ1	1	やや暗い褐色	強い	炭粒、ローム粒	墓墳か
	2	やや暗い褐色	あり	ロームブロック少量	
	3	やや暗い褐色	あり	炭粒、ローム粒少量	
	4	やや暗い褐色	あり	炭粒、ローム粒少量	
	5	褐色	あり	炭粒、ローム粒少量	墓墳か
	6	やや暗い褐色	若干弱い	なし	
	7	褐色	あり	炭粒、ローム粒少量 礫、土器細片	
	8	褐色	あり	炭粒、ローム粒	
	9	褐色	あり	炭粒	
	10	褐色	あり	なし	
	11	褐色	あり	炭粒少量	
トレンチ2	1	褐色	あり	なし	
	2	暗褐色	強い	なし	墓墳
	3	褐色	強い	なし	
	4	褐色	かなり強い	なし	
	5	やや明るい褐色	あり	なし	
	6	褐色	あり	なし	
	7	やや明るい褐色	若干弱い	なし	
	8	やや明るい褐色	若干弱い	なし	
	9	褐色	あり	なし	
	10	やや暗い褐色	強い	なし	
	11	やや暗い褐色	強い	炭粒少量、ローム粒少量	30cmの割れた円礫あり
	12	やや暗い褐色	強い	ローム粒少量	上面に大きな礫2点
	13	やや暗い褐色	あり	炭粒、ローム粒少量	
	14	褐色	やや強い	ローム粒少量	
	15	やや明るい褐色	若干弱い	なし	内部に一部攪乱
	16	やや暗い褐色	やや強い	炭粒、ローム粒	墓墳か

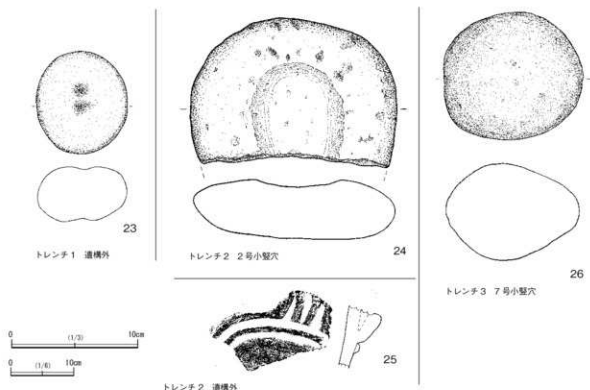
トレンチ	小堅穴	色調	しまり	内容物	備考
トレンチ 2	17	褐色	あり	なし	
	18	褐色	あり	5mm程度の炭粒、ローム粒	墓壙か
	19	褐色	あり	炭粒、土器細片	
	20	やや明るい褐色	あり	なし	
	21	褐色	やや強い	炭粒少量	
	22	褐色	あり	炭粒少量	
	23	やや暗い褐色	あり	炭粒、ローム粒	
	24	褐色	あり	なし	
	25	褐色	若干弱い	なし	
トレンチ 3	26	褐色	強い	なし	
	1	やや明るい褐色	あり	なし	浅い落ち込みか
	2	やや明るい褐色	あり	なし	浅い落ち込みか
	3	やや暗い褐色	あり	炭粒少量、ローム粒少量	
	4	褐色	あり	炭粒わずか	
	5	褐色	あり	炭粒少量	3つの穴か
	6	暗褐色	強い	炭粒、ローム粒	中に礫、上面に丸石
	7	褐色	若干弱い	炭粒少量	
	8	褐色	強い	炭粒わずか	
	9	やや暗い褐色	あり	炭粒、ローム粒	20cmの礫と小礫含む
	10	暗褐色	強い	炭粒、ローム粒	
トレンチ 4	11	褐色	若干弱い	炭粒やや多い	
	1	暗褐色	あり	炭粒少量	15cmの礫あり
	2	褐色	あり	なし	浅い落ち込みか
	3	やや暗い褐色	あり	炭粒	
	4	暗褐色	強い	炭粒、ローム粒少量	
	5	褐色	強い	炭粒少量	
	6	褐色	強い	炭粒少量	攪乱か、上面に礫
	7	暗褐色	弱い	炭粒、ロームブロック	
	8	暗褐色	強い	炭粒やや多い、ローム粒少量	
	9	褐色	若干弱い	炭粒ごくわずか	
	10	暗褐色	強い	炭粒、ロームブロック少量	柱穴
	11	暗褐色	強い	炭粒ごくわずか	
	12	暗褐色	あり	炭粒	
	13	褐色	あり	炭粒	
	14	褐色	強い	炭粒少量	内部に畑の耕作痕
	15	暗褐色	あり	炭粒	



第19図 トレンチ 1・2 遺構位置図 (1 : 80)



第20図 トレンチ 3・4 遺構位置図 (1:80)



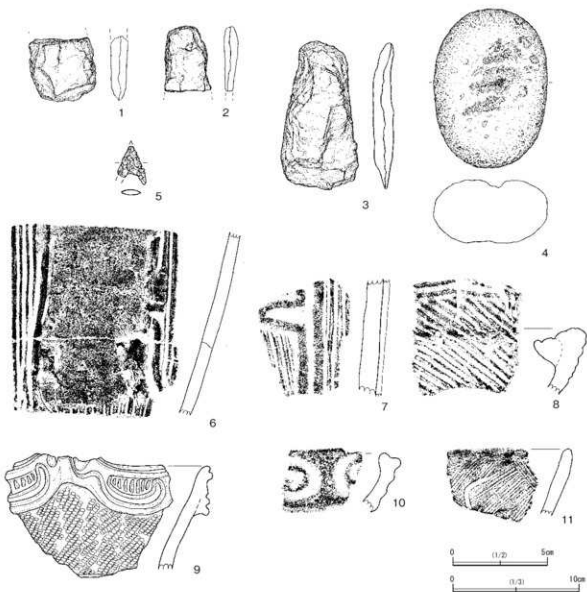
第21図 トレンチ1～4出土遺物 (23・25:1/3、24・26:1/3)

23・24・26:輝石安山岩

その他の遺物

本遺跡の調査が決定してから掘削作業までの間に、調査担当者が富士見中学校で受け持っている授業「総合的な学習の時間」があったことから、7月18日に当該授業を受講している中学校1年生と表面採集調査を実施した。遺物をプラスチックコンテナ半箱ほど拾うことができたが、土器の小片がほとんどで、図示できるものは1・2・5の石器3点のみであった。1・2は石鏃、5は石鎌である。

先述したように、本遺跡は堆積土が浅く、遺構外の遺物はほとんど見られない。3・4・6～11は重機掘削の残土から発見されたものである。3は石鏃、4は凹石である。6・7は曾利Ⅰ式、8は曾利Ⅱ式、9・10は曾利Ⅲ式、11は曾利Ⅳ式である。なお、11は南北トレンチで発見された第15図11と接合しないが同一個体である。



第22図 遺構外出土および表面採集遺物 (1~4・6~11: 1/3、5: 1/2)

1: ホルンフェルス、2・3 粘板岩、4: 輝石安山岩、5: 黒曜石

第4章 自然科学分析

第1節 分析概要について

今回の調査で出土した資料のうち、4号住居址埋壙（第13図2）の炭化物について、放射性炭素年代測定を実施した。本分析についてはバリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、同社からの報告書より内容を引用、編集した。

第2節 放射性炭素年代測定

（1）試料

4号住居址から出土した唐草文系Ⅲ段階の埋壙の口縁部に付着していた炭化物である。

（2）分析方法

土器から付着炭化物を必要量削り取る。塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1mol/Lであるが、今回は試料が少なく、化学的に脆弱なため、炭素の損耗を防ぐため、アルカリの濃度を薄くする（AaAと記載）。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C -AMS専用装置（NEC社製）を用いて、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）、 ^{14}C 濃度（ $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX-II）、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6等）、バックグラウンド試料（IAEA-C1）の測定も行う。 $\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の ^{13}C 濃度（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma 68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver & Polach 1977）。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、OxCal4.4 (Bronk 2009)、較正曲線はIntCal20 (Reimer et al. 2020) である。

（3）結果

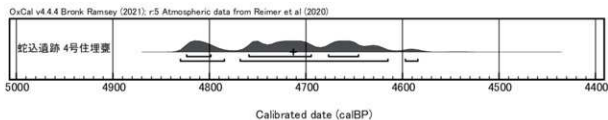
結果を表2、第23図に示す。試料は測定必要なグラファイトが得られている。同位体補正を行った値は、 $4170 \pm 25\text{BP}$ である。

暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期（ ^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データセットは、IntCal20 (Reimer et al. 2020) を用いる。 2σ の値は4830～4584calBPを示した。

表2 放射性炭素年代測定結果

試料 番号	性状	方法	補正年代 BP (暦年較正用)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代				Code No.	
					年代値			確率%		
						σ	cal BC 2875 - cal BC 2850	4824 - 4799	calBP	14.2
蛇込遺跡 4号住居址 埋炭 (No.2)	土器付着 炭化物	AaA (0.1M)	4170 $\pm$ 25 4169 $\pm$ 24	-28.13 ± 0.63		cal BC 2810 - cal BC 2746	4759 - 4695	calBP	36.0	YU- 17418 pal- 14514
						cal BC 2728 - cal BC 2697	4677 - 4646	calBP	18.0	
						cal BC 2881 - cal BC 2836	4830 - 4785	calBP	20.0	
						cal BC 2819 - cal BC 2666	4768 - 4615	calBP	73.5	
						cal BC 2648 - cal BC 2635	4597 - 4584	calBP	2.0	
						2σ				

- 1) 年代値の算出には、Libby の半減期5568年を使用。
- 2) BP 年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68.2%が入る範囲) を年代値に換算した値。
- 4) AAA は、酸・アルカリ・酸処理を示す。AaA はアルカリの濃度を薄くした処理を示す。
- 5) 暦年の計算には、Oxcal v4.4を使用
- 6) 暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用
- 7) 較正データベースは IntCal20を使用。
- 8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 9) 統計的に真の値が入る確率は、 σ が68.2%、 2σ が95.4%である



第23図 暦年較正結果

第5章 まとめ

第1節 出土遺物について

今回の調査において出土した土器の様相として特徴的であったのは、町内の遺跡の中では唐草文系土器の出土が多い点である。井戸尻遺跡群における中期後葉の集落遺跡においては、基本的に土器の組成は曽利式であり、客体的に唐草文系土器が入り込む。しかしながら、本報告で図示した土器のうち約3割を唐草文系土器が占めており、特に埋蔵のある住所址3軒のうち、2軒で唐草文系土器が使われている。これは町内の他の遺跡に比べて非常に多い印象を受ける。

曽利式土器は八ヶ岳南麓から西関東にかけて広がり、唐草文系土器は長野県中部・南部に広がるため、本遺跡は土器文化圏の境に位置する。唐草文系土器が認知される中で、当初よりその分布は「東は八ヶ岳西麓と南麓の西辺りへと伸びて曽利式と重なるけれども、八ヶ岳南麓の主体部にまでは及んでいない。」(中部高地縄文土器集成グループ1979)との認識があったものの、その境がどこにあるのかは明確になっていなかった。

本遺跡の東には八ヶ岳の南麓と西麓を画する立場川が深い谷をつくっており、この立場川以東は格段に唐草文系土器の出土量が少なくなる。こうした点から、立場川が唐草文系土器文化圏を画するひとつの境であることが今回の調査で確かめられた。

また、4号住居址埋蔵で年代測定を実施し、唐草文系Ⅲ段階の土器が紀元前2881～2635年であることが判明した。放射性炭素年代測定例が少ないと言われている唐草文系土器で分析できた事は意義深く、あわせて供伴した曽利Ⅲ式土器との並行関係をおさえられた事は、大きな成果であった。

第2節 蛇込遺跡の縄文中期集落について

本遺跡は『井戸尻』(藤森編1965)にも取り上げられている遺跡で、「表面採集40分ほどで、土器片40点、凹石2点、石匙1点、打石斧3点、石鏃1点を得た。なお、採集された土器は猪沢式・井戸尻Ⅲ式・曽利Ⅰ～Ⅴ式である。こうしてみると、この遺跡は縄文時代中期中葉から末にかけて相当大規模に発達した集落址で、今後の発掘調査に大きな期待がもたれるわけである。」との記述がある富士見町内でも数少ない拠点集落であり、町の縄文時代を語るうえでは欠くことのできない重要な遺跡であるが、これまで一度も本格的な調査が実施されたことはなかった。

また『井戸尻』では「黒色土はきわめて浅く、(中略)地表からの観察だけでも堅穴の発見は容易で、堅穴の存在する箇所は、円形に黒変し、土器・石器などの遺物が集中しているのが認められた。」との記述もあり、本調査地点の堆積土の状況とも一致している。

本来であれば破壊される排水溝部分(南北トレンチ・東西トレンチ)のみの調査で完了となるが、確認調査のための試掘トレンチを入れることで、集落の様相をつかむことができた。地形や住居址の配置などから、本地点は環状集落の東端であり、集落の中心は道路を挟んだ北西側の畑地にあるものと考えられる。縄文時代中期後葉の典型的な環状集落であると思われるが、集落の形状や全容把握については今後の調査に期待したい。

また、前述したように、今回の調査で出土した土器のうち、約3割が唐草文系土器であり、2軒の住居址で埋蔵となっていた点は非常に興味深い。富士見町の、ひいては諏訪地域における縄文時代中期後葉の文化圏を考えていくうえでも重要な遺跡といえるだろう。

付. その他の調査

本報告で記述した調査以外にも、小規模な発掘調査が3回行われている（第1図）。いずれも遺構や遺物は発見されていないが、埋蔵文化財包蔵地の範囲を確実なものにするための材料となった。

（1）平成24年度調査

平成25年3月に包蔵地北東端で個人住宅建設が計画されたため、発掘調査を実施した。調査区のほとんどが漆黒土であり、深い埋没沢であったことが判明した。また、西側で一部ハードロー面を検出したことから、大きく削平されている土地であることがわかった。遺構および遺物は発見されなかった。

（2）平成31年度調査

平成31年4月に蛇込遺跡の範囲外、包蔵地南東の隣接地に太陽光発電所建設が計画されていたことから試掘調査を実施した。予定地に7本のトレンチを入れたが、人為的な遺構や遺物は発見されなかった。調査地点の南北に黒色土層が堆積していたが、すべてのトレンチの南西側、標高の低い部分で確認されたため、南北に走る埋没沢であると判断した。

（3）令和2年度調査

令和2年4月に、包蔵地東端において携帯電話基地局建設に伴う発掘調査を実施した。令和元年調査地点より標高にして6mほど立場川方向へ下った地点である。人為的な遺構や遺物は発見されなかった。地山との境で拳大の円礫が多くみられるため、旧地形が沢であったと判断した。

参考文献

- ・今福利恵 2005「曾利式土器編年再考—甲府盆地を中心に—」『山梨県考古学会誌』15号 山梨県考古学会
- ・御原功一 2008「曾利式土器」『小林達雄先生古希記念企画 総覧 縄文土器』
- ・中部高地縄文土器集成グループ 1979「中部高地縄文土器集成 第1集 - 縄文中期後半の部 その1-」
- ・島居龍蔵 1924「源訪史 第1巻」信濃教育会源訪部会
- ・藤森栄一編 1965『井戸尻』中央公論美術出版
- ・守矢昌文 2013「源訪地域における縄文時代中期の土器群構成とその分布」『日本考古学会2013年度長野大会研究発表資料集 文化の十字路 信州』
- ・山梨県考古学会 2021「山梨県考古学会2021年度研究集会 曾利式土器とその周辺 資料集」



トレンチ1～4 全景（東より）



1号・2号住居址（南西より）



1号住居址 炉址（南西より）



2号住居址 炉址（南より）



3号住居址 埋甕（東より）



4号住居址 埋甕（東より）



南北トレンチ埋没沢（南西より）



地割れ痕（西より）



トレンチ 1 遺構検出状況
(東より)



トレンチ 2 遺構検出状況
(東より)



トレンチ 3 遺構検出状況
(東より)



トレンチ 4 遺構検出状況
(東より)



トレンチ 3 2号小竪穴遺物出土状況
(南より)



富士見中学校 1 年生 表面採集調査風景



井戸尻考古館の歴代館長と調査作業員（2号住居址にて）



平成24年度発掘調査（東より）



令和元年度試掘調査（北より）



令和3年度発掘調査（西より）



1号住居址 (No.16 埋甕)



1号住居址 (No.17)



1号住居址 (No.18)



1号住居址 (No.19)



3号住居址 (No.5 埋甕)



3号住居址 (No.6)



4号住居址 (No.1 埋甕)



4号住居址 (No.2 埋甕)

報告書抄録

ふりがな	じゃごみいせき							
書名	蛇込遺跡							
副書名	太陽光発電所建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	町内遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	副島蔵人							
編集機関	長野県富士見町教育委員会							
所在地	〒399-0214 長野県諏訪郡富士見町落合10777 TEL 0266-62-2400							
発行年月日	2023年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
なごみ 蛇込遺跡	ながのけんみていけん 長野県諏訪郡 富士見町落合	20362	79	35度 54分 3秒	138度 14分 35秒	2019.7.23 ～10.17	396.43m ²	太陽光発電所 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
蛇込遺跡	集落址	縄文・平安		住居址、墓墳		縄文土器、石器		
要約	縄文時代及び平安時代の集落遺跡であり、町内でも縄文時代中期における拠点的な集落として知られている。本遺跡内において、開発事業に伴う埋蔵文化財の照会があり、保護協議を重ねて平成31年に発掘調査を実施することとなった。当初、太陽光パネル設置箇所については盛土で遺跡を保護する設計であったため、削平される浸透トレンチ部分のみの調査を予定していたが、表面採集で拾える遺物量に対して遺構が少なかったため、遺構の広がりを確認する必要があった。そのため急速、盛土保存する部分にも試掘トレンチを設定して内容確認を実施することとなった。試掘部分において縄文時代中期後葉の住居址を4軒発見したが、堆積が浅く遺物が多く見られたことから住居址部分については完掘し、残りの小堅穴については記録を取って現状保存することとなった。 調査の結果、縄文時代中期後葉の住居址と小堅穴およびこれらに伴う遺物を発見した。調査地点が環状集落の東端であることが判明した。また、唐草文系土器文化圏のひとつの境であることが確認できた。							

蛇込遺跡

—太陽光発電所建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日 2023年3月31日

発 行 長野県富士見町教育委員会

印 刷 ヤジマプリント